第 11 講：「元の理」のジェンダー（論）

おやさと研究所主任
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

はじめに

「元の理」の話は人間創造の元はじまりの話であるから、その点において神話的要素はあるにしても、信仰者にとっては、神様の話であり、この話は「教理」である。したがって、信仰者は、そこに、「存在理由を基礎付けるもの」「人間が従い守るべき範型（生きていくモデル）」「儀礼の根拠」を見出すことになる。講座では、こうしたことを前提とし、人間の「性」が「元の理」に、どのように語られるのかについて考えてみた。

1．ジェンダーについて

まず、セクシュアリティ（セクシャリティともいう）言葉について、ここでは「人間の性のあり方」といった意味、性の総体と考えておく。セクシュアリティにはそれを特徴づける①身体的性（セックス・生物学的な性）、②性自認（ジェンダー・アイデンティティ）、③性的指向（セクシャル・オリエンテーション・どんなセクシュアリティの人を好きなるのか）、④性表現（ジェンダー・ロール／性役割）の４つの側面がある。

ジェンダーは、性同一性と言われる要素で、割り当てられた“からだの性”とは異なることもある。私は何者であるかということを性の側面から考える時の性別となる。また、性表現は、性役割と理解されものであり、性別ごとに期待されやすい役割や行動に関連すると考えられている。だから、「性」は、「生」や「生活」と密接な関わりを持ち、「生（生き方）」や「人生」を決めている面もあることが理解される。

ジェンダーは、ある社会において、生物学的男性ないし女性にとってふさわしいと考えられている役割・思考・行動・表象全般を含む性別で、男性にとっては男らしさであり、女性にとっては女らしさであるということにもなる。男らしさや女らしさには、生物的な男性・女性が社会的にいかにあるべきか、という価値観が反映されている。社会（社会集団）がその性についてどのように思っているのか、どのように振舞うのが良いのかなど、その社会における「性」の役割や規範を示している。まさに当然のこととして受容されてきた「行為」を求める。したがって、その役割や規範から外れると、偏見や差別の対象になることにもなる。社会規範は、一般的には社会生活を送るのに「便利」とも言える側面があるとともに、「当然のこと」、「当たり前」、「普通」という言葉にある社会的期待となって、抑圧として受け取られることにもなる。

2．「元の理」と原典

2．1．「みかぐらうた」

「地と天」を象って「夫婦」を拵え、それは「この世のはじめ出し」と歌われる。

このよのぢいとてんとをかたどりて
ふうふをこしらへきたるでな
これハこのよのはじめだし

2．2．「おふでさき」

「おふでさき」では、元はじまりについて、この世（人間の世界）を「初める」、人間を「初めた」と言われる。まず、

このよふのぢいと天とハぢつのをや
それよりでけたにんけんである（10：54）

に注目すると、「ぢいと天」という「ぢつのをや」から「でけた」のが人間であり、「よふきゆさんがみたいゆへから」（14：25）人間をはじめかけた。「どろうみ」の中に「にんけんのたね」である「どぢよ」に「しゆごふにんけんとなし」、「いざなぎといざなみい」をひきよせて「にんげんはぢめしゆごをし系」、「どろうみ」の中の「うをとみ」を「なわしろとたね」とし「ふう〳〵はちめた」とある。十全の守護は「身の内」に仕込まれ、神の心を尽くしたものであると言われる。

3．十全の守護と十柱の神

『天理教教典』第四章「天理王命」（pp.38-39）には、「親神は、元初りに当り、親しく、道具、雛型に入り込み、十全の守護をもつて、この世人間を造り、恆にかわることなく、身の内一切を貸して、その自由を守護し、又、生活の資料として、立毛をはじめとし、万一切を恵まれている。その守護の理は、これに、神名を配して、説きわけられている。」として、「十全の守護」を説く。この「十全の守護」には、十の神名（男女５柱）が授けられ、かぐらづとめの際に役割にあたる「つとめ人衆」の性別に反映される。そして、「即ち、親神天理王命の、この十全の守護によつて、人間をはじめとし、万物は、皆、その生成を遂げている。」と教える。

こうしてみると、人間の初めだしについて「元の理」で教えられているのは、かしものである「人間身の内」の守護である。くにさづちのみこと（人間身の内の女一の道具）と月よみのみこと（人間身の内の男一の道具）及びいざなぎのみこと（男雛型・種の理）といざなみのみこと（女雛型・苗代の理）は性に関した守護、かつ対（ペア）であることから、人間は「有性生殖」するものとして守護される。すなわち、生物としての人間に与えられた「十全の守護」は何よりもこの、生きる生物としての人間への守護であり、「世界」に授けられた守護によって、その世界の中で生かされている人間に授けられた守護を教えていると考えられる。

4．いわゆる“女は台”

①『みちのだい』に掲載された「先人のおもかげ」「初代夫人の道」に見る女性たちの布教への行動力には、目を見張るものがあり、信仰への確信と喜びとに裏打ちされていた。時代が下るにしたがって増加傾向を示す「内助」という記述は、社会のジェンダー観が反映されているかのようである。

② 1990 年出版の『信仰に生きた女性たち：道の先達として、妻として』の前書きは、夫が主役で、妻は脇役であるということを明示している。しかしながら、女性信仰者たちは、教祖の生き様を辿る信仰によって、自らの生き方を変え、周辺社会に大きな波紋を起こし、「ジェンダー平等」を実現させていったとも言える。

③「おさしづ」では、天理教の信仰（「この道」「道」）には、「男女の隔てがない」ことが繰り返し語られる。これは、天理教の信仰（「女の道」「この道始めたは男か女か」）をするのに、性別による隔てがあったことが窺わせるものだとも言えよう。この性別による隔ての正体が「ジェンダー」という性別に与えられた「男性像・女性像」であった。「セクシュアリティは“わたしとは何者か”“わたしとは誰か”に関わり、生き方を左右するものである」ことを述べて、講座の締めとした。

最後に「論達第四号」の「親から子、子から孫へと引き継いでいく」ということは、結婚して子どもを授かっている人々にとっては、違和感がないことかもしれない。親子間における信仰の伝達・継承だと受け止められる。一方、この「普通」の状態にない人はどういう信仰実践をすべきかを考えてみると、信仰を伝えること、人を育てる中で自分も共に成人していく歩みということになろう。同世代・次世代へと信仰を繋いでいくことが、「親から子、子から孫へと引き継いでいく」ことになると思う。

社会通念・社会規範に引きずられるのではなく、教祖の教えに照らして、自分らしさ（徳分）を見出し肯定、発揮する行動が、喜びの信仰へとつながっていく。セクシュアリティはその土台の一つなのである。